

## 心敬と慈円和歌

### ― その受容と変奏 ―

伊藤伸江

〔キーワード〕心敬の連歌論・和歌・連歌 慈円の和歌 正徹 『了後日記』 荻に夕風雲に雁がね

#### 一 はじめに

心敬は、主著『ささめごと』<sup>1)</sup>(改編本)の中で、連歌において「道の境に入り侍るとは、いかばかりの蛩雪をあつめての事に侍やらん」との問いに対して、「自在無窮不可説の風雅をつくし、此道の悟を得べきは、新古今集辺の歌仙の作なるべし」と述べ、後鳥羽院・良経・慈円・俊成・定家・家隆・西行・寂蓮の名を並べて、「これ等の心・姿、上下の継ぎまななどをねんごろに見分、工夫修行に入りて、連歌の取捨、付け侍らん境を悟りしるべしと也。ふるき連歌・大かたの好士の句などをのみ学び侍ては、此道の真実の境にはまだひはて侍るべしと、先達語り侍り。」と説く。心敬がこのように新古今歌人に学ぶことを力説するのは、「古人秀歌ども、古今集・新古今集な

どの内の名歌の姿、自讃・三体など、言葉面影を日夜むねに工夫な  
くては、まことの歌連歌のことはり・姿・眼をば悟りがたく哉。こ  
れらの庭訓、清岩和尚毎々申給へる事也」(『所々返答』<sup>2)</sup>第一状)と  
あるように、正徹の歌学を学び、その強い影響を受けながら連歌作  
者として自立したゆえであり、正徹の考えを受け継いでいる部分が  
非常に大きい。

さらに心敬は、同じく『ささめごと』で、「歌には、親句疎句といへる事、さまざま沙汰し侍り。連歌にはあるべからず哉」との問いに、連歌における親句疎句の付様は「此覚悟修行最用也」とし、疎句体の例歌として、草稿本改編本共に定家と慈円、正徹の和歌をあげている(改編本では、式子内親王歌が追加される)。心敬が、新古今歌人中、疎句体の歌例にまず歌を引くのは、定家と慈円なの

であった。

『所々返答』第二状においても、「ただ後鳥羽院の比の作者にて、此道は過古久遠未永劫の歌仙は出で失せ侍るをや。中にも、慈鎮和尚・定家卿などは凡生を離れ、まことに無相法身の境なる歎」と慈円を歌仙の筆頭にあげ、師正徹の傾倒した定家と並べ示している。晩年の執筆（文明三年以降）とされる『老のくりごと』<sup>3</sup>では、「清岩和尚云、「我は為秀卿・了俊の末葉に侍れども、歌はただ定家・慈鎮の胸のうちを直に尋ねうらやみ侍り。下りはてたる家の二条・冷泉をばしたひ侍らず」と常に語り給し」と述べていた<sup>4</sup>。だが、正徹自身は、「定家の風骨をうらやみ学ぶべし」（『正徹物語』<sup>5</sup>）と、学ぶべき歌人はまず第一に定家を考えており、心敬が自著の中で、常に慈円を定家と共に出し、むしろ先んじて記す場合もある点は、やはり目にとまる。

この論では、慈円の歌が、心敬の連歌論にいかに取り込まれ、実作の歌・連歌に、いかに影響を与えていったかを考えてみたい。（なお、考察のための和歌・連歌の引用の際には、出典と必要と思われる主な他出文献を括弧内に示している。）

## 二 慈円の「むねと珍しき様」の歌

『後鳥羽院御口伝』<sup>6</sup>には、慈円について、次のように述べる。

大僧正は、おほやう西行がふりなり。すぐれたる歌、いづれの上手にも劣らず、むねと珍しき様を好まれき。まことにも、そのふりに、多く人の口にある歌あり。「やよ時雨」、「木の葉に

袖をくらぶべし」、「願はくはしばし闇路に」、「これていなり。

されども、よのつねにうるはしく詠みたる中に、最上の物どもはあり。「あふげば空に」、「涙くらもらで」、「雲にあらそふ」、「秋ゆく人の袖」、「松を時雨の」、「庭のむら萩」、「刈る人なしに」、「鳴立つ沢の忘れ水」、このほか多かり。

慈円の秀歌を、「むねと珍しき様」と「世の常にうるはしく詠みたる」ものと分けて指摘しているが、ここに述べられている、「むねと珍しき様」について考えたい。

「むねと珍しき様」、すなわち珍しい表現ゆえに「多く人の口にある」という慈円の和歌三首は、「やよ時雨物思ふ袖のなかりせば木の葉の後に何を染めまし」（新古今・冬・580、拾玉集・南北百番歌合・1789）、「明けばまづ木の葉に袖をくらぶべし夜半の時雨よ夜半の涙よ」（老若五十首歌合323、拾玉集・五十首和歌・576）、「ねがはくはしばし闇路にやすらひてかかげやせまし法の灯」（新古今・釈教・1931、慈鎮和尚自歌合97）である。

「多く人の口にある」という点を具体的に見ていくと、「やよ時雨」の詠は、後代、『定家十体』（面白様）、『三五記』（景曲体）、『題林愚抄』（冬部「時雨」）、『歌林良材』（虚字言葉）に入る。「やよ時雨」歌は歌学書や類題集の関心対象であり、心敬とほぼ同時代の『歌林良材』、『題林愚抄』にも入るのである。ところが、「やよ時雨」を使用した詠歌例、句例はほとんどなく、正徹にも使用例はみあたらない。その中で、心敬は秋の発句として次の句を詠んでいる。

やよ時雨ともなへ秋の山めぐり（心玉集・秋・837）

また宗御も、付句に

御笠野ちかしをはつ瀬の山

やよ時雨ふるの中道までしばし(宗御発句並付句抜書・2594)と詠んでいた。

『歌林良材』の編者一条兼良は、正徹や法華宗寺院本能寺を介して心敬ともいづらかつながらがあるし、『題林愚抄』に関しては、『心敬集』に存する「応仁元年百首」の奥書(旅宿、題林など依無所持)から、心敬は、応仁元年(一四六七)八月以前に所持していたらしい。「やよ時雨」という呼びかけ語句は、こうした歌壇、連歌壇状況の下、宗御や心敬により、連歌に詠み入れる試みがなされていたのである。

次に、「木の葉に袖を」の詠は、後に『夫木抄』(巻十六冬部一「時雨」)、『定家十体』(鬼拉体)に入る。この歌は「夜半の時雨よ夜半の涙よ」という特徴ある表現を持つが、他の歌人の詠歌例は、「夜半の時雨よ」に一例(住吉社歌合嘉應二年・旅宿時雨・寂超・54)、「夜半の涙よ」に一例(題林愚抄・恋一・二条為明・635)管見に入るのみである。しかし、慈円の用いたこうした詠嘆の助詞「よ」を重ねた表現が、正徹の和歌(例「吹しをり野分をならす夕立の風の上なる雲よ木葉よ」(草根集・夕立風・1974・永享五年六月廿五日詠))に影響を与えたとの考えが、既に論じられている。ただ、慈円の表現は、第四句第五句を並立させた表現であったが、正徹の表現は「雲よ木葉よ」のように一句内に表現二つを並立させたものが多く、その点にはむしろ連歌的な短縮表現の影響も考えうるかもしれないが、慈円の表現と正徹の表現の間には関係があるう。心敬も正徹と同様の

表現技法を連歌において用いていることが、次に示す例からわかっている。<sup>169)</sup>

さればこそ嵐よ雨よ花のとき(心玉集・発句・699)  
今朝の月さほりがちなる影もうし

涙よ露よかへるさのみち(心玉集・恋・1287)

秋ふけぬあらしは袖に吹きさぬ

月すさまじな霜よ木葉よ(心敬僧都百句・秋・2210)

「しばし闇路に」の詠は、『慈鎮和尚自歌合』(八王子・97)、『新古今集』に入る外に、『時代不同歌合』(36)、『新三十六人撰正二年』169、『定家八代抄』1787に選ばれるが、やはり「闇路にやすらふ」という発想では他の歌人の類歌が乏しい。

以上から、これらの歌は、例歌として歌書に入ることはあるが、「珍しき様」ゆえ、その用語があらたに歌詞として選択され模倣されることは少ない。だが呼びかけ、詠嘆といった慈円の特徴ある語句の使用方法は、心敬に関心を持たれ、学ばれ、むしろ連歌で試みられていたのであった。

### 三 外穢内浄の句の例歌

心敬は和歌、連歌に用いる言葉・表現についてどのように考えていたか。『ささめごと』(改編本)では、「外穢内浄・外浄内穢の句あるべしと也。」として、次のように「姿をかざらで心に艶ふかき歌」を三例あげている。引用文中の三首の例歌は、草稿本、改編本共通で、草稿本が仲実歌第三句「見つるまで」とある以外は異同はない。

歌連歌にも外穢内浄・外浄内穢の句あるべしと也。姿をかざら  
で心に艶ふかき歌、

かしこまるしでに涙のかかるかな又いつかはと思ふわかれに

西行

になひもつさうきのいれこ町足駄世わたる道を見るぞかなし

慈鎮

あさ露をはかなき物と見つるまにほとけの兄に身は成にけり

仲実

此等外穢内浄の歌なるべし。たとへば、金をつづりに包みたる  
ごとし。上はつたなくてうちに宝あり。

例歌のうち、慈円の和歌は、『拾玉集』内「賀茂百首」の雑歌<sup>2396</sup>  
である。この歌は、『拾玉集』では下句が「世をゆく道の物とこそ  
見れ」であり、『六家抄』も同様の下句)、心敬の引用とは相違し  
ている。さらにこの歌は、歌学書では、今川了俊の『了俊日記』に  
引かれた歌であった。

『了俊日記』は、「一、世俗言、只詞をよめる証哥」の歌例に、慈  
円歌を次のように七首のせている(傍線は稿者)。

雲とづる宿の軒ばの夕ながめ恋よりおつるあめのおとかな

(拾玉集1664・六百番歌合948・玉葉集1471(以上三集第四句「恋

よりあまる」・夫木抄<sup>17233</sup>(第四句「こひよりおつる」)

ながめをば照日の影やへだつらん春秋もなきなつすがた哉

(拾玉集5750・老若五十首歌合163・夫木抄<sup>17237</sup>)

三ヶ月のほのめく空に秋をこめてそゞろぎわたる山のはの雲

(拾玉集5755・六家抄860(以上二集第四句「そゞろに」・老若  
五十首歌合213・夫木抄<sup>17239</sup>)

しづのめもおほち井筒に夕すゞみしだるき麻の衣すゞぎて

(拾玉集2329(第四・五句「古帷子の足洗ひして」・夫木抄<sup>17243</sup>(第

四・五句「しだるきあさの衣すゞぎて」)

呉竹もいさ、か風の音づれて吹くや枕に木の葉ちるなり

(拾玉集2350(初句「呉竹に」・第四句「更くる枕に」・夫木抄

<sup>17244</sup>(初句「呉竹に」)

になひもつさうきのいれこ町あしだ世わたる道を哀とぞみる

(拾玉集<sup>2396</sup>(第二句「箆器の入れ籠」、第四・五句「世をゆく

道の物とこそ見れ」・夫木抄<sup>9230</sup>、<sup>17245</sup>(第二句「さふきのいれ

こ」・六家抄<sup>2030</sup>)

人ならばうらみもすべしいか、せぬ我をすかすはわがこゝろな  
り

(拾玉集<sup>2067</sup>(第三句「いかにせん」・夫木抄<sup>17246</sup>(本集及び新

編国歌大観『了俊日記』は第三句「いかがせん(む)」)

七首はすべて『夫木抄』卷三六「言語」部に例示されている慈円の

例歌(17233〜17247)に入っており、配列順も同じで、「雲とづる」「しづ

のめも」「になひもつ」歌の下句も『夫木抄』と『了俊日記』は同

形である。了俊が『夫木抄』から配列順に一部抜き出し、使用した

ものであることが確認されよう。これらの歌の中で、傍線を付した

語句は、『言塵集』において、やはり連続して引用され、言葉の意

味を注されており、その点からも了俊が『夫木抄』を参照し、自著

に取り入れた事がわかる。<sup>16)</sup>

『了俊日記』で連続する「しづのめも」「呉竹も」「になひもつ」の三首は『夫木抄』からとられたため「拾玉集」と語句の相違はあるが、「賀茂百首」の詠、「人ならば」歌は「日吉百首」の詠である。元来「賀茂百首」は、既成の歌語ではない新奇な語句を進んで使用している点に非常に特徴のある百首であった。

さらに例えば、『為兼卿和歌抄』<sup>15)</sup>は、次のように、俊成、定家、西行、慈円に新奇な語句の和歌があると述べた上で、慈円の歌例は「日吉百首」からあげている。

…先達のよまぬ詞をもはゞかる所なくよめる事は、入道皇太后宮大夫俊成、京極入道中納言、西行、慈鎮和尚などまで、殊おほし。

(中略)

慈鎮和尚の百首ながら勅撰に入程の哥を讀て日吉社にこめんとてよまれたるにも、初五字に「まいる人の」とも「らちの外なる人のこゝろ」ともよまれたる風情のみにてあれど、後鳥羽院皆御合点ありて、おさまれり。

新奇な、歌語として不都合な語句を使った歌例として「参る人の丸寝の跡を残す霜は神の心に朱の玉垣(拾玉集・2092)」「神よいかに憂しや北野の馬場結ふ埒の外なる人の心は(拾玉集・2068)」があげられており、それらがあつても「日吉百首」は後鳥羽院の賞美に預かつたとして、新奇な語句の使用を可とする証にしている。「日吉百首」も新奇な用語の使用をまず特徴としてとりあげられる百首なのであつた。

『了俊日記』の例歌は、「はじめて新き言をよまれたる哥ども此一帖に貫書て侍る」もので、了俊は例歌に詠まれた詞(「新言」)も排除せず使用すべきとの立場である。

しかし、心敬は俗語を持つ「になひもつ」の和歌に対して、積極的に「内浄」を見ており、「たとへば、金をつづりに包みたるごとし」。上はつたなくてうちに宝あり。」と評する。こうした和歌の理解の仕方、「になひもつ」の和歌の下の句が、『拾玉集』では「世を行く道のもの」とこそ見れ」と単に「いれこ」や「町足駄」を指すものであつたのに対し、『夫木抄』、『了俊日記』の「世わたる道を哀とぞみる」を経て、あらたに『ささめごと』では「世わたる道を見るぞかなしき」となり、連歌の独立した一句のように変化していることとあわせて思われよう。例えば、心敬にも、一日の終わりの日暮れ時、刈った蘆を背負つて帰る民の姿を「世わたる道」を詠む前句に付け、日々の暮らしの苦しさを具体的に表現した付句があつた。

世わたる道ぞさぞなくるしき。

かりをける蘆をになひて帰る日に(芝草内連歌合・2941)

慈円の「になひもつ」の和歌は、心敬によつて、現世に生きる悲しみを具体的な民の姿の描写によつてあらわした和歌として理解され、あらたな形で引用されている。ささやかな生業に生きる民の姿を、俗語の使用によつて描写し、現世に生きる悲しみを具体的な姿を示すことで知らしめた歌、そこに俗語があつたことが、内実を感じとらせるためにはむしろ効果的に働いた歌、と考えていたのであろう。

外穢内浄の歌として同時に例示された西行歌も、『夫木抄』巻三六「神祇」部<sup>15968</sup>と、慈円歌同様に同巻「言語」部<sup>17312</sup>に入り、『玉葉集』巻二十、神祇にも次のような詞書で入る歌であった。

そのかみよりつかうまつりなれけるならひに世をのがれて  
 後も賀茂社にまゐりけるを、としたかくなりて四国のかた  
 へ修行しけるが、またかへりまゐらぬこともやとて仁安三  
 年十月十日夜まゐりて幣まゐらすとて、たなをの社のもと  
 にてしづかに法施たてまつりけるほど、このまの月ほのぼ  
 のとにてつねよりも神さびあはれにおほえ侍りければ

かしこまるしでに涙のかかるかなまたいつかはと思ふあはれに  
 この歌は、出家後も変らぬ賀茂社への信仰を述べる詞書と共に、後に『賀茂皇太神宮記』にとられ室町期に広く流布したが、西行歌は『なまめいと』においてのみ、下句が「またいつかはと思ふわかれに」となっており、それによって、いわば詞書の内容も一首に含めわかりやすく表わす形になっているとも読める。

また、心敬自身が発句を詠む「年次不詳何路百韻」<sup>65</sup>、66、67に、次の付合が存している。

杉古き森冷じな神の庭 心敬  
 木綿四手うごき風の吹く音 永澤  
 袖にのみ涙のかかる御祓して 宗沅

神域の森の恐ろしい程の神々しい様子から、木綿四手に吹きすぎる風、さらに袖に「涙のかかる」御祓の様が付けられる。『徒然草』第二十四段の「すべて、神の社こそ、すぐくなまめかしき物なれや。

物古りたる社のけしきもたゞならぬに、玉垣しはたして、神に木綿懸けたるなど、いみじからぬかは。」<sup>21</sup>が思い出され、西行歌の表現も意識される付合である。

さらに、仲実歌は、「朝露をひさしき物と思ふ世にほとけの兄にいかでなりけん」（永久百首・老人・647）であり、管見では他に『夫木抄』巻三五「雑」部<sup>16543</sup>に入るのみだが、『夫木抄』と永久百首との間に本文の相違はない。永久百首の現存文本では、仲実歌の本文に異同はなく、永久百首の宗祇注も「人の身のはかなきに比すれば露は久しきと也。仏のけんとは八十にあまるまでいきたる人の利口にいへる也」と注することから、上の句は「朝露をひさしき物と思ふ世に」の形で享受されていたであろう。とすれば、歌意が単純にわかりやすくなる『ささめごと』での「朝露をはかなきものと見つるまに」という形は、慈円の歌と同様に、心敬が把握した歌の形であろう。

例歌三首共に、『夫木抄』に引用があり、それは心敬の言う「外穢」の語句を持つゆえであったが、『ささめごと』での心敬の関心は、歌の「内浄」部分を含めての例示であり、結果として歌句が改変され『夫木抄』と関わりのない形で例示されていることがわかう。本来の歌の形を厳しく守り引用するという姿勢ならば、改編本を作成するどこかの時期において正される可能性があるのだが、いずれの歌も草稿本の形のままで改編本も存している。心敬は歌句の表面上の正しさに重きを置いていない。心敬にとっては、俗語使用の問題は、こんな語句も先賢の使用例があることにより使用可能で

あるといった、表現上の問題ではなく、内実を深めるためにいかなる語句を使用できるかという句作の真髓を考えるための問題なのであった。

#### 四 疎句体の例歌——正徹の歌学の流入——

『正徹物語』には、慈円が和歌に耽溺していることをいさめた、弟（本来は兄）信円（興福寺一乘院門跡）からの教訓状に、「皆人に一のくせはあるぞとよ是をばゆるせ敷島の道」と返したという逸話がある。正徹は幼少時に奈良の門跡に奉公に出ており、奉公先は一乘院門跡かと推定されることから、これは若い頃に南都興福寺辺で聞き知った、和歌に淫する慈円の逸話であろう。その他、『正徹物語』には、慈円の歌の評価を述べた、次のような記述がある。

一、三牀の哥にも、慈鎮和尚の「ねぬにめざむる」の哥ぞ、誠に玄妙なる物にて侍る。先「ねぬにめざむる」と云は、仮令宵の間ねもせでゐたるに、時鳥の鳴を聞いて、おどろきたるがめざむるにて有也。是を心えぬ人は、「ねいらではなにとめざむべきぞ」といはんは道理なれども、其たぐひは云に及ばず。これは玄妙なれ共、上手はなほしもおもひよることも侍るべきか。此詞を得ても、上句には「夕されの雲のはたてをながめて」とも、「宵のまに月をみて」共読べき也。しかるを「まこもかる美津のみまきの夕まぐれ」と有ぞ、更に凡慮も及ばず、理の外なる玄妙、更に何共せられぬ所にて侍る。か様にかけはなれたる所を取合する事、自在の位と乗あてのしわざ也。

賞讃される歌は、『三体和歌』夏歌14「真孤刈る美豆の御牧の夕まぐれねぬにめざむる郭公かな」である。この歌は、「太くおおきに」という指示で詠まれたもので、『三体和歌』以外の歌書では、『夫木抄』夏部<sup>294</sup>に入るのみ。『愚問賢注』<sup>295</sup>以来、二条派は『三体和歌』を範として歌体を詠みわけて詠むことに否定的であったが、正徹とその門流は、様々な歌体を受け入れ、『三体和歌』を重視している。正徹には『三体和歌』を附載した藤原家隆の「詠百首和歌」（偽作）の筆写本が存し、彼が『三体和歌』を学ぶべきだと考えていたことは、先に引用した『所々返答』第一状からも明らかである。

さて、正徹はこの歌に関して、「ねぬにめざむる」という表現の「玄妙」さと、さらに加えて上句と下句との「かけはなれたる所を取合する」ことを賞讃する。しかし、後代の『三体和歌』の諸注では、「ねぬにめざむる」の「奇特」さは賞讃されるが、上下句の懸隔は指摘されない。上下句の懸隔についての評価は、定家偽書に影響された正徹独自の視点からのものであり、『ささめごと』で、この慈円の歌が疎句体の歌の一例として入ったのは、正徹の考えが明らかに影響したゆえであった<sup>296</sup>。

心敬の連歌論において疎句体の和歌の重要性は言うまでもない。心敬は『ささめごと』で、「上下のくさり親しく心得やすくいひ果てたるは、親句の歌也。又、上の句と下の句と心だに通じ侍れば、あらぬさまの事をもほしきままに継たるは、疎句の歌なるべしと也」と親句・疎句歌を定義し、疎句体の例歌を示す。草稿本では定家二首、慈円二首、正徹一首（作者名「正徹」とあるのは尊経閣文庫本、

天理図書館蔵佐々木信綱旧蔵本)、改編本ではこれに式子内親王一首が加わり、正徹歌の作者名が無注記となる。

まず、この『ささめごと』の慈円の疎句体の例歌について考えた。例歌は、次の二首である。

思ふことなどとふ人のなかるらん仰げば空に月ぞさやけき

(老若五十首歌合<sup>453</sup>・新古今集<sup>1782</sup>・定家十体(長高体)・三五  
記19・自讃歌35)

まこもかるみ津の御牧の夕ま暮ぬめにめざますほととぎす哉

(三体和歌14・夫木抄<sup>2941</sup>(以上二書第四句「ぬめにめざむる」)このうち、「ぬぬにめざむる」の歌を、正徹が非常に高く評価したのは、先に見た通りであるが、「仰げば空に」歌には、正徹が、どうにも押さえられない自らの憂悶の思いを託し示唆したことが『東野州聞書』<sup>49</sup>に見えている。

夜雨と云題にて、

夜の雨の心のそこにとほるかなむかしの人や袖ぬらすらむ

此歌の心をしらざるよし申侍りしかば、「愚僧がには、此十余年が間に読み出たる心中候。唯、慈鎮和尚の歌に、『神もや袖をぬらすらん』と侍る歌、『あふげば空に月ぞさやけき』と侍る歌どもにて、その心おしはかるべし」と有て、作意とかく申さる、儀なし。

「あふげば空に」歌は、自讃歌の注では、釈教、述懐、恋の歌と三種の解釈があり、『自讃歌常縁注』<sup>50</sup>は、述懐の歌とし、「何事を思へるとも云がたし」「ただ打歎てあふぎたるに月のさやかにてみえ

けるを、我をとひけるにや、などとふ人のなかるらんと、いかでか思ひけるとなくさみたる也」と考えていた。正徹が常縁に示したもう一首の慈円の詠「神もや袖を」歌は、「わが頼む神もや袖をぬらすらんはかなくおつる人の涙に」(新勅撰集・神祇・述懐のうたよみ侍けるに・561)で、こちらも心中に深い思いを抱える人を詠む述懐歌である。

また、草根集には「夜の雨の」歌(522)以外に、「夜雨」題で「降る雨のその心に友はみなあるも昔の暗さおも影」(562)のような、やはり夜雨に遠い昔を憶う歌がある。正徹にとつて「夜雨」題は、深い懐旧の念に満たされた心をうたう重要なモチーフであった。

加えて、慈円の『老若五十首歌合』の詠についても、つとに和歌に示される重く濃厚な述懐性の指摘がある。「夜半の時雨よ夜半の涙よ」という詠嘆表現に特徴のある「木の葉に袖を」の詠もこの『老若五十首歌合』で詠まれていた。

正徹は、慈円の詠じた、他人に理解されない孤独な心中の理解を願う歌に共感し、二首の歌を自らの思いをも体現するものとして深く受け止めたのであり、暗く重い精神性を持つ慈円の和歌は、正徹の述懐歌に深く関わり影響を及ぼしている。心が疎句体の和歌として例示する慈円歌は、正徹の評価が高く、正徹の和歌の創造に関与する精神性を持つ和歌であったと言えるのである。

加えてここでは、疎句体の例歌として示された、一部伝本に「正徹」と作者名が記載される和歌にも注目してみたい。次のような歌である。



椎の葉のうら吹きかへす木がらしに夕月夜見るあり明のころ  
この歌には、『新編国歌大観』、『新編私家集大成』を見る限り同一  
歌はない。木がらしの風に裏返る椎の葉裏の白さに、明け方ではあ  
りながら夕暮れ時の月を見たかのように思うと詠む歌であるが、正  
徹には、次のような、類例となる和歌が見られる。

ふもとより又吹きかへす椎の葉の嵐にこゆる嶺の白雲

(草根集・嶺上雲・2225・永享六年十月二十八日詠)

入がたの月の後せの山風にうら吹きかへす嶺の椎柴

(正徹千首・月・369)

後せ山松ぞ色こき椎の葉のうら吹きかへす嶺の風に

(草根集・嶺上松・4823)

嶺わたる月に光をそへてけりうらよりしろき椎の葉の霜

(草根集・椎柴・11032)

また、『桜井基佐句集』<sup>363</sup> 363、364には

雲にいでいる月の面影

椎の葉のうらふきかへす秋の風

の付合がある。それゆえ、これは、白く裏返る椎の葉の様を月に比  
するという、正徹と同時代の和歌、連歌のとりあげた題材によつて  
詠まれた歌と考えられる。

そして、下の句の、有明の頃に夕べの月を見ると一見矛盾し  
た状況表現を短い字数の中に詰め込んだ詠みぶりは、和歌というよ  
りも、一句内にある理不尽に思える状況の謎解きを次の句に要求す  
る機智的な連歌の句に近い。また、使用された「夕月夜」「有明」

という語句に注目すれば、例えば『河越千句』<sup>38</sup> 第一百韻52、53に存  
する

たのむや末の契ならまし 満助

有明にうつれしのおる夕月夜 心敬

という心敬の句は、一句にこの二つの語句を備える。心敬のこの句  
は、今はあの人のことを思っている夕月夜の頃だが、この恋がこの  
ままうまくいき、できることならばあの人と、逢瀬の後の有明の月  
を眺めるようになっていきたいと夢想している恋の句であった。そ  
して、この句の発想の淵源となっているのは「夕月夜」「有明」が  
いずれも詠みこまれた次の和歌であろう。

わが恋はほのめきそむる夕月夜くもらで見ばや有明の空

(拾玉集・初恋・四一五三)

慈円は「卯花の色にさしそ夕月夜道行末も有明の空」(拾玉集・  
春日百首・夏月・2558)や「もろともに出し都の夕月夜今は浪間に有  
明の月」(拾玉集・送佐州百首・2915)のように「夕月夜」から「有明」  
への時の流れを意識した対比を歌に詠み入れている。さらに慈円に  
は、対比される二つのものを、多く一首の下の句の中に併存させて  
機智をねらう詠歌の特徴がある。例えば「いかにせん年のこなたに  
年暮れて春より宵に春のあけぼの」(拾玉集・甘題百首・立春・b1)  
等のごとくである。「椎の葉の」歌の下の句には、心敬が自句に取  
り入れた、慈円の用語と詠風とが、より連歌に近く凝縮した形で入  
りこんでいるのである。

## 五 心敬の創作と慈円和歌

最後に、心敬の歌・連歌から慈円の影響をさらにあげ、心敬の創作の特徴を見ておく。

心敬の自讃の歌には、その創意を慈円の和歌で説明した自注がある。「寛正百首」<sup>(35)</sup>26歌の自注（「芝草句内岩橋下」にも注が存する）である。

## 故郷橘

なき人や古りにし宿にかへるらんはなたちばなに夕風ぞふく

物の色もわかぬ昏黒に、古木の花たちばなの荒庭にうちかほりたるは、花を思ひをき侍し魂霊や只今きたり侍りぬると、すゝろに誤たれ侍る心也。彼和尚御詠「しでに風ふく」などの面影なるべし。此歌に作者心すこしと、め侍り。

自注から、この歌は、慈円歌「手向にも折から神やなびくらむ四手に風まく夕闇の空」<sup>(36)</sup>（拾玉集・日吉百首・209）を念頭に置いた詠であることが判明する。「手向にも」歌は、『為兼卿和歌抄』で引用された「参る人のまろ寝の跡を残す霜は神の心に朱の玉垣」と連続しており（両歌は「略秘贈答和歌百首」では「神祇」題で対となっている）、自由な用語遣いが特徴とされる「日吉百首」の歌だが、捧げる木綿四手が風に揺れる夕暮れ時、神が降臨され願いが聞き届けられる様に着目し、自讃の歌の想を借る心敬は、正徹同様、慈円の示す憂愁の念、その精神性を深く受け止めていたといえよう。

この時、慈円には、「軒近き花たち花の夕風に荻吹く秋の暮は物

かは」（拾玉集・文治三年句題百首・盧橘通砌・828）という、風に軒の橘の薫る夏の夕暮と荻に風が吹く秋の夕暮の情趣を比較した歌もあることが思い出される。慈円は橘薫る夏の夕べに軍配をあげたが、心敬が自讃歌とした「故郷橘」詠は、まさしく夕暮れ時、橘の薫る故郷の家の情景から詠みだされていた。<sup>(37)</sup>

一方、宗祇も、『竹林抄』巻三、秋連調40に入集させた心敬句を、『浅茅』<sup>(38)</sup>で取り上げて、次のように注している。

三のさかひは今ぞまよへる

おもはずも月を二日の空にみて

是は、何田緒にもかゝらず、たゞ心の端的をいへり。利根なる風骨なり。二日の月といふ事、慈鎮和尚の御歌に侍るにや。

この付合は、宗祇が「利根なる風骨」と評したように、釈教の句の数詞「三」に「二」を付け、句境は月齢へと転換し、秋の句となした心敬らしい転換の鮮やかさが特徴である。

宗祇の言う「慈鎮和尚の御歌」とは、「あるかなきか心の末ぞあはれなる二日の月に雲のかかれる」（拾玉集・廿題百首・初恋・b55、六家抄1584）であり、歌に詠まれた「二日の月」は非常にまれな用語で、歌では正徹が詠み試み、それ以後は小沢蘆庵が使用するにすぎない。連歌でも管見に入らず、むしろ江戸期に俳諧の用語となる。宗祇が看破したように、慈円の珍しい表現を心敬は見逃さず連歌に転用し、付合という連歌独特の技法の中で、少し形を変えてあざやかに割り付けていくのである。

そしてまた、心敬は慈円の機智的な表現を使いつつ、独自の深い

心情を詠む歌や連歌に昇華させていく。

慈円歌「庵さす野辺の旅寝の悲しきは萩に夕風萩に朝露」(拾玉集・四季雜各廿首都合百首・3007)は、下の句に萩と萩、夕に朝と対比を盛り込むが、こうした姿勢にも心敬は鋭く反応し、朝夕の対比を夕にしぼった上で、関東にての名句

わが心誰に語らむ秋の空

萩に夕風雲に雁がね

(吾妻辺云捨<sup>22</sup>・232、新撰菟玖波集・秋上・706)

を残している。先の例、拾玉集<sup>828</sup>はこの句にもよみがえる。この時、付句の下半分「雲に雁がね」も、「鳴きて訪ふ声ぞ悲しき深草や野辺には鶉雲に雁がね」(拾玉集・秋・5005)に存する表現を使っている。慈円歌の「悲しき」ものでまとめあげ、前句の心中を示唆した一句なのである。

また、「萩に夕風」という詰まった表現の語句を和歌に使った例は、管見では慈円以後には、飛鳥井雅親詠「ながめすてわすれんとすれば秋の空村雲まよひ萩に夕風」(統聖槐集・萩・187)のみであるが、心敬の付合にも似た歌で、注目される。心敬は文安三年(一四四六)正月廿日、畠山賢良家の月次会始で、飛鳥井雅世と正徹と同席しており(『善孝法印日記』)、心敬の名が記録に残らなくとも、飛鳥井家の歌人と武家の歌会で同席する機会があったと思われる。正徹の歌壇ネットワークと、正徹の歌の弟子として永享初年頃から歌会に出席し、後には畠山・細川氏の連歌を指導する、連歌宗匠としての心敬のネットワークは重なる部分が多く、その環境から与えられる

刺激を選び取りながら、心敬は句を生み出していったのであろう。

心敬は、文明五年(一四七三)三月に著した『芝草内連歌合』において、自句の左作者を「山家樵夫」、右作者を「江村漁父」と名づけた。「北山樵客」(右・慈円)と「南海漁夫」(左・良経)とでつがわせた『南北百番歌合』を思つての趣向であらう。この連歌合では、春十八番、夏七番、秋十六番、冬七番、恋十四番、雑三十八番と雑の割合が非常に高い。郷里紀州を戦場とした畠山氏の内紛や悲惨な応仁の乱の様を見聞きし、我が身一つで東国に避難し滞在せざるを得なかった心敬の心中の苦悩は、既に『寛正百首』、「心敬僧都百首」等の述懐性の強さにはつきりうかがえた。慈円の和歌の新奇さ、珍しい表現技法と、深い述懐性も、正徹を介して、心敬の和歌・連歌表現に大きな影響を与え続けたのである。心敬晩年の文学活動、特に関東での創作への強い影響はさらに明らかならねばならない。

#### 注

和歌及び歌書の引用は、断らない限り、『新編国歌大観』による。「拾玉集」の引用は、和歌文学大系「拾玉集」上、下(平成二〇、平成三三、明治書院)により、歌番号も同書に従う。「草根集」の引用は『新編私家集大成』による。和歌・連歌の句は、私に適切に漢字仮名等表記を直し、清濁を付した。

(一) 引用は、草稿本は日本古典文学大系「連歌論集 俳論集」(昭和三六・岩波書店)、改編本は中世の文学「連歌論集三」(昭和六〇・三弥井書店)に

よる。

- (2) 引用は中世の文学『連歌論集三』(昭和六〇・三弥井書店)による。
- (3) 引用は中世の文学『連歌論集三』(昭和六〇・三弥井書店)による。
- (4) この発言は、『所々返答』第二状では、「清岩和尚、尤冷泉家の随一末葉なれども、「われはいづれもうるさく侍り。くだりはたる家をば尊まらず。ただ俊成・定家のむねのうちを学び侍る」とつねに語り給へる」と記されており、御子左家の祖の二人の名があがっている。こちらの形の方が正徹の発言としては自然であり、『所々返答』第二状の成立時期は明らかではない(木藤才蔵氏の推定では応仁二年かとされる)が、『老いのくりごと』に慈円の名が出ることから、心敬晩年に慈円へのより一層の傾倒がなされたのではないかと推測も可能ではないかと考えられる。
- (5) 引用は『歌論歌学集成第十一卷』(平成一三・三弥井書店)による。
- (6) 引用は『歌論歌学集成第七卷』(平成一八・三弥井書店)による。
- (7) 『歌林良材』の成立時期は「永享年間もしくは文明年間の成立か」(新編国歌大観解説武井和人氏)とされる。また武井和人『一条兼良の書誌的研究 増訂版』(平成一二・おうふう)第一章第二節「歌林良材集」では文明年間とする。
- (8) 引用は、貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』(昭和四七・角川書店)による。
- (9) 引用は、貴重古典籍叢刊11『七賢時代連歌句集』(昭和五〇・角川書店)による。
- (10) 正徹は、文安元年(一四四四)二月に、兼良の源氏物語講義を宗柳と共に聴いているし、文安四年と宝徳二年には兼良から法衆百首などの題を与えられ歌を詠んでもいる。また『歌林良材』二類本奥書によれば、

兼良自筆本が明応三年(一四九四)に法華宗寺院妙蓮寺に存した由だが、正徹 正広、宗伊は妙蓮寺での歌会、連歌会に参加している。兼良は寛正元年(一四六〇)、本能寺の僧日定の法華要品の講説を賞讃し、康正二年(一四五六)以後、寛正六年(一四六五)までの間に本能寺において張行され心敬が宗匠をつとめた『落葉百韻』は、兼良の発句をもらっている(伊藤伸江・奥田勲『落葉百韻』について)(愛知県立大学日本文化学部論集)第一号・平成二二)。

(11) 佐藤恒雄『古代中世詩歌論考』(平成二五・笠間書院)第三章第四節「心敬和歌自注断章」。

(12) 稲田利徳『正徹の研究』(昭和五三・笠間書院)第二編第四章「雲よ木葉よ」の表現」。

- (13) 注(12)に同じ。稲田氏は心敬の表現に正徹の表現が影響を与えたのではないかということも指摘されている。
- (14) 引用は貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』(昭和四七・角川書店)による。
- (15) 引用は、未刊国文資料『今川了俊歌学書と研究』(昭和三一・未刊国文資料刊行会)所収鷹司本による。
- (16) 了俊が自著をまとめる際に、「夫木抄」を多く参照したことは、『言塵集』の細目からはつきりわかり、「了俊日記」の「世俗言、只詞を詠める証哥」に配列された歌群の語句は、『言塵集』においても使用されている。(荒木尚『言塵集』一本文と研究一)(平成五・及古書院)研究参照。)また、『言塵集』と『夫木抄』の関係を論中で扱うものに、鈴木元『夫木和歌抄』の享受と連歌(「夫木和歌抄 編纂と享受」平成二〇・風間書房)がある。
- (17) 石川一『慈円和歌論考』(平成一〇・笠間書院)第四章第八節「慈円と

賀茂社」。また久保田淳『中世和歌史の研究』（平成五・明治書院）内「中世和歌における寓意と思想」。

- (18) 引用は、『歌論歌学集成第十卷』（平成十一・三弥井書店）による。
- (19) 引用は、貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）による。
- (20) 引用は、貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）による。
- (21) 引用は、新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』（平成元・岩波書店）による。
- (22) 橋本不美男・滝沢貞夫著『校本永久四年百首和歌とその研究』（昭和五三・笠間書院）による。
- (23) 注(22) 書所収神宮文庫蔵「十代抄出」による。
- (24) 引用は、『歌論歌学集成第十卷』（平成十一・三弥井書店）による。
- (25) 『愚問賢注』は、恋歌の詠み方について、特別な詠法はないとし、三体和歌も「一時一会の御沙汰也。いつもの躰をさだめられたるにあらず」と述べている。また後世における三体和歌の享受の様相については安井重雄『三体和歌の享受と古注序説』（自讃歌注研究会誌・平成七・一〇）が論じている。
- (26) 佐藤恒雄『古代中世詩歌論考』（平成二五・笠間書院）第三章第二節「正徹筆藤原家隆」詠百首和歌II
- (27) 例えば書陵部蔵『三体和歌抄』I「『三体和歌』注I翻刻と紹介」（二）I所載翻刻による（『古典論叢』十二号・昭和五八・六）。ただし安井重雄氏注25論文による分類での冷泉流注が「奇特」という評価を持つというわけではない。
- (28) ただしこの歌の第四句について、正徹は「三体和歌」や『夫木抄』の

通り「ねぬにめぎむる」とするが、「『三体和歌』諸注は管見の限りすべて「ねぬにめぎます」であり、心敬は『三体和歌』諸注同様「ねぬにめぎます」とする。ここでも心敬は冷泉派の参照する『夫木抄』などは見ていないようである。

(29) 引用は『歌論歌学集成第十二卷』（平成一五・三弥井書店）による。

(30) 引用は王淑英編『自讃歌古注総覧』（平成七・東海大学出版会）による。また、同書解説は、この歌について諸注の比較を試みている。

(31) 例えば久保田淳『新古今歌人の研究』（昭和四八・東大出版会）第三編第二章第四節三「老若五十首と句題五十首」、石川一『慈円和歌論考』（平成一〇・笠間書院）II第三章第三節。

(32) 引用は、古典文庫『桜井基佐句集』（平成七）所収書陵部蔵斑山文庫本による。

(33) 引用は、古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収内閣文庫本による。

(34) 例えば次の様な歌を詠んでいる。

旅の空にたぐひなき物は夜半の月浪の枕に草の枕に  
（拾玉集・春日百首・2639）

山桜滝の白糸乱れつつ雪かともいふ雲かとも見る

（拾玉集・賀茂百首・2305）  
 尾上より騒ぎぞわたる女郎花尾花通ふか風の招くか

(35) 引用は、新日本古典文学大系『中世和歌集 室町篇』（平成二・岩波書店）による。  
（拾玉集・賀茂百首・2337）

(36) 青蓮院本においては「手向か（に）もおりから神やなひくらむしてに

風フふくゆユみやみの空」と註によって訂正される前の初句、第四句の形が  
 残存しており(多賀宗準『校本拾玉集』(昭和四六・吉川弘文館)、心  
 敬の記す本文が存したことがわかる。心敬は『芝草句内岩橋下』の自注  
 においても「慈鎮和尚の、してに風フふくク夕やみのこ、ろをぬすみはべり」  
 と注している。

(37) 文治三年句題百首題は、永享年間に冷泉家和歌所の歌会に出題されて  
 おり(『持為集』等)、正徹も永享六年の草庵の月次当座詠歌三十首にこ  
 の百首題を使用した。正徹と冷泉持為とは交流があり、冷泉家から正徹  
 の周囲、心敬に至る範囲で文治三年句題百首題は関心をもたれ、当然和  
 歌も参照されていたと考えられる。

(38) 引用は中世の文学『連歌論集二』(昭和五七・三弥井書店)による。

(39) 引用は、貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』(昭和四七・角川書店)によ  
 る。この句は『吾妻辺云捨』所収の句であることから、関東下向後、文  
 明二年以降の作と考えられる。

(40) 『統亜槐集』187番歌は、詞書に従えば、永享八年七月廿六日の住吉社法  
 楽百首続歌の歌となるが、集中の詞書では、この日に住吉社法楽百首続  
 歌以外に新玉津島社法楽百首続歌、石清水社法楽百首続歌が行なわれて  
 おり、歌題が結題ではないことからこの日とすれば石清水社法楽百首続  
 歌の歌か。

(愛知県立大学教授)